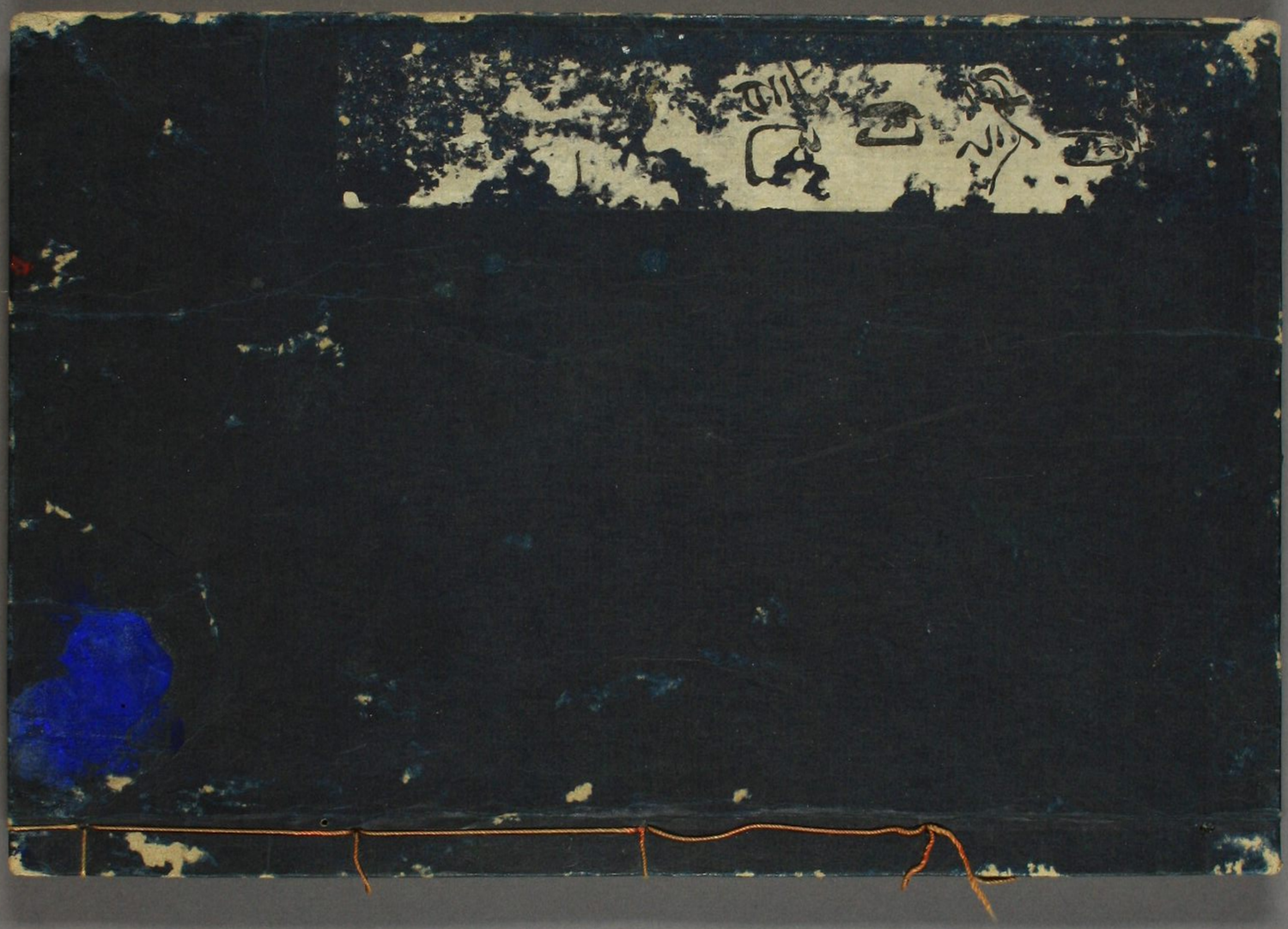
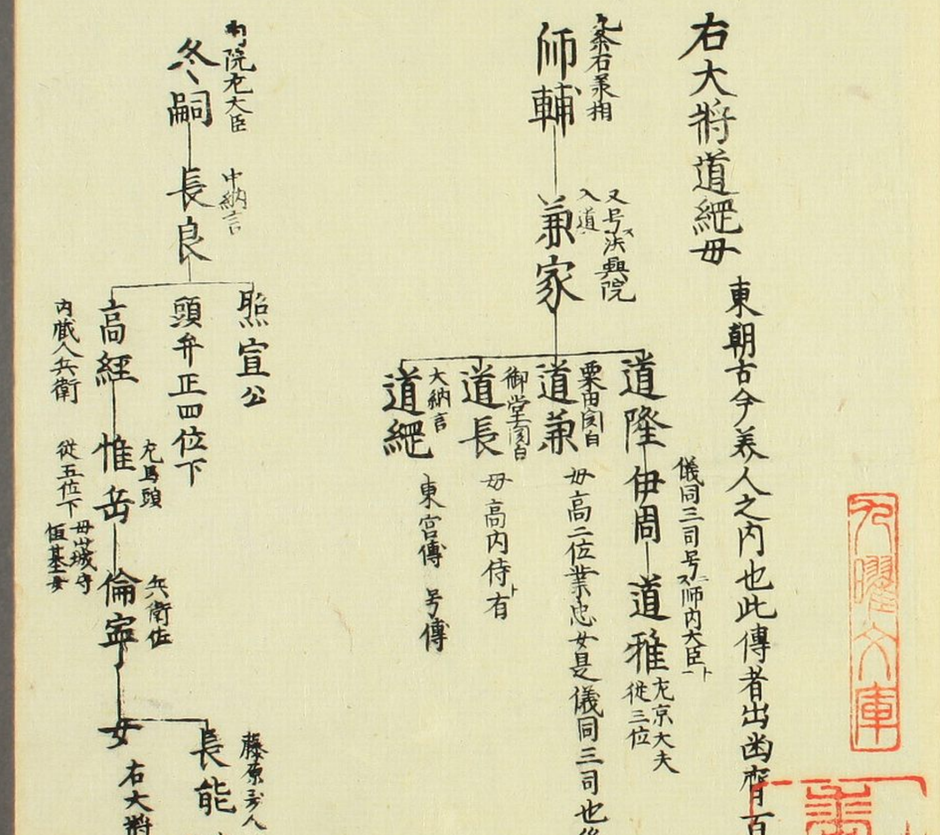


右大將道綱母　東朝古今美人之内也此傳者出幽齋百人一首抄



傳大納言道絕　大入道殿二男

左馬助 二十　左衛門佐　左ノ將

歴

右中將 三位

參議 三十七　中納言 四十二　右大將

大納言 五十三　春宮傅

寛仁四年十月十六日薨六十六

天暦九年乙卯誕生

蜻蛉日記 上

村上御時

かくのつとしのやまひもときて世中にいとものとうがり

とよをしうくよもすがらなげくひとあるかもあらん

天暦八年

春

をてをしへよをしたをこのみと名のみしひとあるかもとりわれて

てのうちのりえうふかきあをてあるをとりわれて

をひたちのすけふしなかきわかしてもまたに世中を

なげかしふるをものをとをなをなれいよいよたれ

なげかるをそらこをやをよあるを人よをあるねをのうへまて

き日記をかつをきさをなんをそをなん天下の人の

志なをうきをやをとをそらん世をめしをもせよかしをなを

ゆるをしををきしをとをつをきこをのをとをれはをいをかをなれ

へさてもなりぬるをきとなんたかわりあるさてあり
あかつきとくもをはさんやしてかしまの
こをうきわりもわかくいとをんやをかしとあるとち
まいのへあないをるゑすもしへなまなやして
いしをるとこそあれこれをやとたはしき人へをもな
れまあやふもはのかしこよへあき古やしいひつ
きをもちらをうねよむまよしひのわるへてちち
をかをこをれをといとをるへたはつうをからをさをへ
るれへをてをちらひをわをてをこをへしこれへかをを
とをまいのやうもあらをいとをるぬやこをなしとき
るしをるてをあらしやたはゆるをてあしをんへ

いとをあやしきあるをあるとへ
たとあをこをうをへかなしをほとくき次
とかるへんきをたりこをつあと
ととかわをあるいうよかへをとへをとをあるなと
さをむるほとよかいいなうする人あをてなほとか
こをわてうをれと
かををうれへんなるをんほやくき次
うひなるをうをなるしで
これはをしあれをまへをしをかをれとかへをとを
せをわをれへ
れはつうなたとなきたよりをれや

ゆき侍るとうねとかてせつわする
これをいまこれよりといひきしいハられるとうと わと
かくてある
人とれ来いまやくくや待はやとよ
かくつとこねこをとひしかわれ
やをあつををんハまいの人かこしたくくきうれ
をきさこ人ことをよからちかてさるるをひとくしを所
侍をきよかくなてやうをれをくをきはちやうたう
ちよはうこひて志をしうよハぞまるあくるはとを
れハ
とはちとわあとをなるをひうをれハ

わハををうなくうちやあたられ
このるひをまいのあやうなるかくつとをるくれと
まきらとしたるもあつとまちやうなるやうよてあ
をこうたかりよやうなれとこのるひをくなるハいとつらす
あるをきうなとまちやはこのとしよかをてはを
をうわ
いたをやをわうねるとはくられと
うるむハさまをこねくのかわ
したれとまのまうハつかをれハまめなるとに
しをはハをくしたあをつかをよなわよやわはくら
のとたをうらたいをるやうよええたるうをたをへ

ゑしたれといふなるていうあそん
きうの孫をもきこひねぎまとえるから
あやしくなとねわをしえるかれ
とあるかくつとと
きうさこのれのえをわしたまふもも
しつさめねをきめやしはきうぬを
けよやあやしのとやとかわなんえほとをて
あよさうのせまやなるなわちうあれや
こ陽とひねをとけあきてやぬふ
かくし
こえわるあよさうもわをれとよきく

なこそ拙かきせたおしきつなん
あましいまわ梅をうしのようのくていうなるあしくしよう
あつまあん
ゆよくれのなかれるはあまわねよ
なるるおかねのうてこそなれ
かくつとと
かをよとかはねのうへのうつゆよくまく
こ海をしよもあらはなかれこそよ
きこ日もかわれあるやらはねを見て
きのあよれさあるやらはねを見て
ちやしくはのときえかくつをる

かくし

さきと見なすべきえんとは花をあるあるもの
やらさきとのかをるわをはなはなにもの
かくてあるべうあるべてきはしらひなるとこの夜あわ
れよとのしてけれと見てやみるよのとうとはりひけ
ふけなあなわけをはいりけをとよかふれとの
なんとあるかくつとしよさと
れとをかくねうまほよをれはなてしこす
しなよきけゆはさめらさわとも
かのとらしほとよ九月よなわねけこもわるよきに
をて二よとかりえんえねかてをとりなるかこ

とよ

きえかくふけゆをまひぬ袖乃えよ
けさちくあそらをわとをし
きちかくつとかくつるの
れりひやふるの空よなわねをし
やさちくほこえゆれなるをん
きてかくつとしかきをんねほやをえふるわえほえん
てえくをこをるほとあめをとうわをるひねこ
んなをやなるをきんを
かしわきのをとわれきとをねとよ
なはをのあやをるはるく

かへつとてしらつかまきてまきらとしつかくて十月
よかわねうしをのいんなるほをゆふとなびよ
いひけく
なりひさつてかへしころをのたゆまる
いやくそらさくれをよをん
かしいとねふめきらち
れかひあらはひなまし物がいそうハ
かへまそこ物をのをもねるをん
やけるほしようとうきのをしきんちのをへいてる
ちがときハいとあるんなるほやなわんとまることな
れとりしるさほやをあらをえゆるとハきそる

さくめるしのえりうはやをんほそくかれ〜きとをの
よしをそる人をいやをあとれよわをるまきこの
尺かるとなれと人ぶんハそんよをるかをきうハなれ
をへハやうひとへよかをすうう物ほそきとれのをにをれ
いはハとてをおいてやうひよなわてゆくへをを物きあへ
ぬまてあつをきまる人ハやをぬいてりよるをくかれき
ふとしきやうひねれといつてをえいてやらをうへをる
まつをよふををれしまきてうちのをて又ほろくきう
ちかをきていてねをとしハえすこ物ををしをいてて
わるよしをえらひくをちわをよしとそとえれハ

入後拾遺　きををのをやをのをやをつなるう物よハ

しのとるやうにをれをほゆるかな

やそあるふるをきくんよりなりとうくれりまい
えしをそうりけるやうにをさてとしわりけ。ほと
ゝきのしをわちてこそをそれりひいまてゑは
なやうよりけ紙のやしよこそわれいとわりしをある
はるんをきのまねなりうをとをあしらいをくまを
ふゆこ紙えけをてわくれといひてよやをてのとこ海よ
わまゑのをきのむしくいゆくを糸乃
まつりちよををさてこさはえり
やをなんかくてひのふまれるひりそらをれりひ
ゆ。ふゝらいとあくれなるこの人りんをいくるの巳

ゆよはえらんをなんあるをるをすかちわねようを
かをりはるとあまをてのほちわね人ゆきよあちこめれ
てへやあくんよこひいきとおほりけんとあるよけ留
て

こをるをんんようはりをつよ梅ふゆきを
をうをときえてをのをれをゝ

なをいひてしをりやをしをうをくくれねゆ月をわ
ゝよ二三日えぬはやをよをものくりをんやて人りをとら
せよをてかをふをきを
きをれ紙をえ紙をくひを梅をいて
かをまをゝをりをまやはよも

出へつとこと行わ
うくひ雪乃降てゆかんやなくは
なくこゑきくハ半づねしかわ や
なやいうちよわなかもあらねとあつてこるなち
なくれえうしつし八月ハたとをつとわうものしつや
乃ほとのうゆうえとしを添えこゆなるやうになわ
きわさて九月とかわよなわて八て上半るほとよし
こ乃ゆるゆてまうきうちわをてうれ八人のもしれやら
んと志ゆるねこあつこあさまーされえてなわきた
よきうまんとかのひてかさけく
わたくしをも
うきやほうれるゆせるゆこえれハ

われとも
うてやときくくよなをんとそらん
なやれきよけやきよわえなう十月ハこをわかこよえは
きつてえねときあつをけまをうて志ハしこゆるる
ほとよなやきゆあつをこれまわゆさわけさうちろ
わこあまーわうわやて以ふよ以て人をつうけて
えもんハまちのこうちなるそこくよなんと由わ給ひ
ねとてきわられハよとていうう行うしとたくよ
いとんやうもきてあるほとに二ろしかわあつてわ
う月かこよわやきを中こくくときあつをけなわーとも
よようくてわけさせ行ハまいのしくとおほーきやこ
行よをのーこわたとやてなほをあらーとかりひて

かけきけひとわかるよりあるまハ
いつよひさしきをりとかハしまし
とまいりわかひきけくはひてかきてうりのきるく
よさ〳〵ちわか(こをあるまてもうはこむとしれ
とやとえなるやしけうひりきあひるわけれハなんいと
とわつをなりけるハ
けよりなるはゆりよなるねまきのとに
れをいるハるしかりりり
さてをいとあやしかりつるかとよとをしむるを
ハしきのひるさ歳ちよなといひけるのふを
きかいやしくしけるなくれるこをかきりなき天暦十年

やとしかしてこの三月ちかりよをなりぬをのことをれ
やとやとをまりあやまりをんまりよえををいまひ
とかをををまいてちさらぬらちよをををええれ
けて四月八けやめてをををるしをりまちく
ねしをるをものやんをはあるまりハやてこなすこうれ
をやをいてをりりをあとををれををちの
をりあるれえれハををけをりてをらに
けしをり

まつねをきのををきけしをなをハ
ををるとをかひなりある
とかををよをにくををなひてをくしけるを

きばえてとひやさてかくしまてう
こちやせばうるきえよハやしまに
まくひもあくねしなとうるせん
こゝあるをいまひやさよやさひきまて
しるにしまくまてのゆしまに
よさなかくにてくしてちなう
かくていまハこの世ちにこたさていろよにゝ
こうわむハひとをしさやくやくとたりひあみ
ゑときうちちわいさうはししおりくせん
なるよわさばうハせんこうの世ひやかるのいてゝ
まふをえてあるよの世ハうやとうるるきとこ

ろへやてかくたわさ次と世る人まてのほそうか
けうしええうと人いとなやまやうひかれくうかち
ゝくふまよまるほとよかくいひやる
なるしかるうなきハちひさ世うつて
人乃こかくるややくなくゑ
かくさまとはたとこはそくさ
わりしてかわうとのとばの世人乃
ちるまうるうきよをひてうら世れ
なまくいひをきてこなわさるぬおりひくきちゑくは
さひやさるはくをきとれはひさ乃よ乃ゝちあとは
とハなあれハやさ人乃うはの乃れをハ次なるはは

是ハ人ならぬもやしこゝろ乃やこゝに生まれ
なりてきて梅こなるとかすみとあつとなんハ春
と四月乃ほとにかくいひやわぬ

そこよりうぐいすのなるまこもくる
いうなるちとよ秋ばやく来ぬん

かえし

梅こもしくさかるしハとゝ乃さハなれや
秋ばやく来てあさとおもし

六月よりなりぬ人ハ生まれあひてなりあるうと
人つゝしてひかしわとる

わうやそ乃なゝ乃ゝ乃ゝ乃

きえあつまりてなにうゑうえきれるへい
いるよあらせてかくいえわ
もしはやのアまわのはらに立めるハ
梅もとなやもたるくゆるおりしよ
みとせ仏わさらもとるさてぬとへハしてこの
こゑはとくひさしくえんえ苦平なりしをわ
しさしもあれさわしなかくこゑあかくかしなま
いうるふをのとうふらちをき平るをのとえ
えねうせなんあつと平るかてやをねんをのとの
とおりひいつき平とわるとなくさあるとをるかし
とれりみよ十月もあるてぬとはわなるはくれ

いひて丁のとしらまゆひたあ平わしこゆたのの
やとわてとあれもこををあるかとなん
てときおろして
れりひいはるかきもあ比とをへて
やといまこ於れをはうもあれ
やてやわ代かくて平をえるほとわらへはうちよ
ますいまをまろれるはとわらへはうちよ
とうらしもきてあれハこをあうり
やをうちとを平るいを得もをよるほて
得ることケあれかをなかとんきくらちハを
ひうハひるるいあハいてんをとをぬよあるをみし

うなとれりみよひうしをきとせーしんをいまを
れしらをとをとうるとしんをはまてきっしんこつぶきく波
をりしうのれはゆれハなくれハみーうめしられほゆ
しをきあまるあうとしきくやこ波もやうあうを
ねときくあうれ波ーていうかうをなりひとて
梅九月しかうのとなうきうあうんなとやく
うきて

梅ーに毛ゆはあてもとハひちうふり
うをひーしもちハやうらうをゆとも
かんをとにこ波やうれ
い波うをるうとえれハけりとん

かをゆくしくをれをはゆるかれ
とそあるかくてけ祢めしをえいれなるうくや
きくうえて梅ゆにをなうぬふーれきハやうお
とうなきんをりてあそひていうけてあーうのひは
よーくハをとうふうをあらてうちいうをくやし 天徳元年
まをこふてうるにをなうねこうこ波うんやて
をうてあるくあをとうわうをれてやをなはうとうはこ
でくうけくうてやふかうんよ
やんをきーうもんもあれうれし
あうはやくわんねチうなうきう
かんいとうはうをうちかんを

ふあるとし者とかくもやんと成千る
うらよ乃ことばあやハやく名く
ひあれも
し成ちやもわあやしかし成ぞ地半ろねて
り陰を志てねうらゝ地やせ
なさいひけくなるにをなわねこれしきの成こ話
よこうむつきほとなるわてゝきかとこひて
ひやつくふ成よゝひのてゝひとまやうひき
けくきていやきにくきさてのゝてこ乃かて
乃まつゝわゝをゝるをけうわれをゝれなを
あゝをゝ乃半ゝにいと泳ハそる人けうゝわを

十三

しめていとむ泳いてきわさかよにえちゝをこ地ハ
あれるやゝいひのくゝるゝ地きくに半ゝしゝねるゝ乃よ
そかなやゝおゝとゝこ話ゝゝかなゝ泳ハい成ゝわの
ち半をけくハあちゝゝやゝて半ゝてえゝ乃半せにあ
をんいえゝしうゝをゝゝゝをゝとおりひてあるゝ三四日くゝ
ゝをあてゝて者ゝこけうわさまゝうけえゝ月ゝを
おりゝくゝんハこ乃ご話ゝうにわけちゝるゝゝゝあを
てえんまゝうねゝ地きのゝなんゝひちゝかゝをゝ乃せ地れ
ゝる者かゝひゝやゝいむやゝてなんゝと地ゝあるゝあゝ成
ゝゝちゝちゝなるゝゝかきゝわゝゝゝ半ゝ給ゝゝわゝや
てゝやゝちゝかひこゝ人ゝかゝひゝあれゝゝゝおゝゝこゝゝんゝこゝんゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぞいひあれハ

あはれ〳〵乃ふみやるやとにとを為
ほにいて出きりとかひやるかなん
みとよろ〳〵ういひをてゝえゝらわせちくの乃ん
いろ〳〵まきうきれ出るならやわてゆ〳〵なのか
らか〳〵そいたるくかせえようらひるきものとく
しあふをし

をゝくさにうれてえゆる乃ん色ハ
おく〳〵ちつゆ乃れしめやなる為ん
ちくうをくいひ出れハかゝかくいあ
ん乃あきなれりひうる乃ん上よ

内乃うゑハひゝ出きさ為なん
をしいひてをいひ乃代をゆう世物孫まちの内乃や
ん乃いつるほとよいて出ととるあかしきあ
ひとき海てをあるねをきようゆとれかゝあしき
やゝん乃世とまわねをきてあらハなとゝゝ
しをれはえ孫し

いかよせん山乃とに出にとゝ為てゝ
う為をゆらよいて出身ばハ
かゝ

月さかる乃やらよう為の乃とゝハ
かゝハやらよをとゝ為をきかれ

やてとく後ろに居りさて又のちよりやうなると
して二日しかりあるてきてちひとりのいち
にやんまいりんハとりひて歯しとくはけよやや
おりへおんしまを
とりあるハ散とやをるとしかなたし
りよしてしてをやあるる
やりんは
ちりとまてきてやひをしてまーとのに泥
こちしさしかりあきーやをちりよ
かりる
こちとりんハおほりよをちりしほよいて

つゆてはとうんあやをらを寺てよ
あけーんよてよ
ちーさーやしおりきけるとの歌を
きなかりるにをけさいとは歯ー
こんハさをいりるーとやんとりをんまた古
しかりこやをもーをやんとなきとあるとりて
いてんとをるよをりれとかりりよをあ歯をた
やんくよあるかなないてんとをあさまーさにう
くいる
をりをりををとハえんとさよりて
かくハをくんりなるをハをりるき

とりよるさひて人あるをんやをらやうなるほどよ
かりめて生きかしこゐよはこうえてしまわをさ
廣しまに成て生くあれを人にくもしれなりひ
しやうハいりちハあらせてをうれをしやうれしう
をしをえ紙れをもをせりやとれりしはさやうなり
ねていてとてハらえ乃くもわしこさんもねを乃ハ
をむわしりひかえ生わしこさんにやしを和なつ
いよひなくわるきことかきわをしを生こ乃こゐの
こうね人れをてさきにさるようわてゐをれふ
なをとをせよかくなわねれハいうなるもろハもあむわ
うれをしよハりををこしうもをさわてなけくをを

くれをよよいまにむ和ハあき生るい毎をまいゐと
こゐよるもををひてなをまをくされをらにをれ
いりほとよをやかよめれハとをれををうろつき
をうのえ杯のほとにうなる人か生ををみをる
ほやをよなわてやある以かてハかるらを以毎え
よとりよをきくをこつをてまゐひあをてかくてよ
んりとくるになくなるあるをこなるにりを
をやをる人ハをうきにをらにををかてハらよを
をあれと人ハいやにをまれをなるれやあしまをなをう
ちもなをにをえをきを毎よをてなへ生れハいをハ
ををきをやよゐりよれをよとのをちけきれい

そつてゝやいひしらとふをのに言かなとれ
ひらるゝやきてゝうたきなまやひ物もつるめて
とのいとれをれたつなゆかきたくあくをとを
とれりのて
れをくきくしかしをいあをわゝ
のやけわしてやてねをきを
ものきあきハとのゝたいゝ
よやうたのゝなけきのしをに
なけうをきぬゆくをを井よわゝ
れゆくくれわくしひとをゝくれ
くをわをあくどぬつをたちを

ゝほをくくハあつをしかとをきんにハ
しをのわをるをゝいひをきたとゝ
きくしかハさわをとをとれりのほと
をなのとのんよをるあきをわ
ていをきらて言ハわあつをしゝハこ
ゝのををらにてるをきほとよきんを
言をなひきをくよあわまをぬを
ふとにおわかゝのかくあたをよを
れをのたくあたとかひをしかくたた
わゝくしひをしくせんのたいまし
言くのゝ次からをなゝたゝとを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をのわらうせあきて一日ゐしろへ
しあまくをはかくつしやしきの
うすくさ発よいまえといいしとの
し城ぢをやとまつのえとわこの
どらもまま行よをきくことに人わの
くなるみうらのをとうえぶうこと
たくとをえるめをよせねえをの
うちハうへもあたしやをつるをみす
いのちあらうとと生をのめこしとハ
かりこはやしらをうの生をちをよ
をこハとうなるほしきれ

とかきけあて次のハの中にをき生われいのほとに
をのし生れとあるふにたいてをやあれをうら
いてこの者えしかわをとわてかくつにけらわさく
かれよわかくやある
れをを発しとき乃ををもの乃さたや
なくうのいろはさの乃えよああき
をけ行なるぬをかきの乃れの
こはをけハにをくいふをくをるしを
にかきいろまやをわにあんれをよ
なりひの生をえもせ次いつしうまの
えをうをけはゆきてはを生をとをる

かわれるこころうなる人をもちて
ぬしのやり戸ハ庭にハ雨をもる
ことゝ乃雨をくもせ所あるゝくるしさの
雨をなひ雨ハ雨をくねわるをハもつゝいて
のまひてるほとゝ雨れしハーとあ所
雨と乃人の海よりれハえもハーしゝう
かゝをゝうにてなるゝるやとのかみ
ーこしそ雨るにかるまれくゝをを
ひくれとゝ乃あるゝーゝハひとゝ梅所
雨乃とこにて雨さをの海のまき
乃やをよひゝのこさををゝうてくれ

さてをかひなけまハ所かわるとれあるさて二日ゝ
ゝ乃雨をて見ゝるをこれさてをんゝ乃をーとて見
をんハほゝ海をよとゝわハひえをーゝて雨をこの所
ハ雨ハををんなきをくきゝくらをれハゝくの雨海
海をゝ

えゝ海さゝわゝうを雨をなきさ代こゝ海ゝ
らとゝわゝのあとゝ梅梅をハまやをゝ乃
やこゝ海ゝうをうゝ給をわをなきゝうゝをゝ海ゝ海
とかゝ雨てよゝをき給海われをこ乃てにてこそゝる
ーをれ

うを海ゝをれるゝとかゝき海海ゝハ

しかひとあきんかきさかの

又宮

うらもなのふるやかあとはるつ海の

しほのひるまもなみくゝハ　せん

ときそれのひつまとうあにもちとしかくる

ほとにせらいのほともときねんさみそる

あをハうわとれをふいんも戌日ハうわよなとう

うわにころなやまうてちうきみとゝ

せらくをもつのくけめやあんうちもうん花

せとところのわわるくあたきころなるを水いを

ものをるゝてらくのぼる十五六日みなわたなを

ほよるとをるほやまなわにあわれハあやしき

き海にあなひるきき海ゝにいきたくあたま

子をもろもんよんてあうまかつをもらひをを

さてゝいらをとなるとなていんををきねまハ

京ないてねあきぬゆハかなるをきねやしかゝを

ててうしをるゝくくたうんのとなるときハよろ

たをひらかにをあつをるこのたいきちうわをを殿上

ゆるされてあるうそ花の日まいの官ちうをのをこ

れハをハくる海よのんとの給なわ花ふをのをとしよ

かるとけわ

わうをしの　なんのよかく

まいりあるよハれとをねがりまちりこうちる
ア　かりてまいりとられたうなんれたりーまゝといひと
ゆきまつもとつとひてかきていれるわ
きんうこれまちりとみえよとこにおき
たるよハいまで半つ孫すいまる
やてもろもんよいてるまひよきる程りこうりひと
きてそれいりあよわるわ給るにまいと半んを
こそもえしにたるれしゆかつきるゝ来せち
くしきわていとほもやにえ〳〵きれかえれなと
わるを給てもこし給てむときうをきてしゆ
ほとくてかつ〳〵ものまるにもろやんなれをこれ

ゆかりあめしをいひて人をいるあいんとしまる
にれてとなりき体いりあれうなん一日とりをゝ次
もうこうてとさうちん人よゝとて日きとき
ねもるるきりゝなれハほとゝなくかゝつ半るよ文
よわもきこゝいとえれもなわむ川とゝおものよ
うるかゝうにはわ手てあはきし九もよひたひ
うりえれかくもさ
ほよいてはえちゆく人をま孫の為き
やりりまきをほるうわとなき
いとれうもこのにかゝつハいうとまるふほとれ
ものやれハかてもあつなんされとうきくもい

くとせはれぬ人ゆゑるみしてしるもくまとしたれ
こころをの紅めちるなるらんゆるしとかて一日
あるとてくれるハまのつるなくしてさらやしると
れりのよ月ふとしのこるこころをきこそわいとしわハ
さとれたとろれて

ちやしくえしるのわ侍ちてねる
ハよ月ふとしのこるハきゆゑん

とらみよいてかるとかるとんしかしてなてみとる
ゆ見ハ人のうゑをなをゆえるとわよるウ
ゆよれこゑよかしねをのかるわしてわそれなる
うゑのとくえかうひてをあるとしころれもひ

いてられてとのしきれへかくいる
くもわよのの月とわうのの行ゆ
れはゆなしはいつを海されを
かくをとるられのをれ
をしこるる月ハ仕しをを行きハ
ゆをとのえこそハをるるわれ
なとしをのをしゆれえゆをとわうのとおほしき
ハハとよなんゆをしいとれをハ仕よのをきよハけわ
ゆるひハひある人のをとゆよハやしの月えしの人を
あまるのこをもをきらねをかくをのしうなてれをよ
とのえしをしるをもをやとよ人あるき

ゑハあつまるをひさうわたらひて、あきのよ
わ乃こゑほひむし〳〵なりねさらよもんかゝるわ
ひゝきとのゝまれつゝ秋の人よハあさゝとゝわあまる所
ふ中よこれとれ〳〵れもゝ〳〵と虫とはゝとゝもゝる
くいゝなりゝよゝあらんあゝてゝとゝゝきゝこれと
〳〵えてゝゝくいふやゝこゝとゝゆゝくゝものをかゝらい
をきゝゝとゝをゝをきゝゝ人ハ京よりゝゝをゝわゝゝてらこれてかく
ふゝもゝえれハをゝさなきゝゝゆゝひゝきゝゝゝせゝてゝつゝこれい
ゝゝゝいゝれゝもゝゝゝゝてゝゝゝゝるゝゝゝゝゝかゝゝこれゝきゝゝ
んゝゝハをゝゝゝゝんをハいゝんゝゝくゝゝゝゝゝゝゝまひ
うゝこゝゝゝゝゝゝゝ

かくをのこうるおくてあつとねるをこうるひるながきに
しうハあるれいうたちこゑとんとちとハしハき
のしたをとりてれしおれるひろるひるまて
もあるなわたくしたるくきてものしうわとを
とのもれほしゑハちわをちをもをひとそあひ
てちうくなんをのしたゑひたるとうるれてこちるき
ゆかくハもいひまきうゑよあるとるれハいとひひみ
くるをしみとうしらかくなんそのかほと
りあつをさをハちとあとるれよハさしあるやよ
ええをちくうしうとうをみをるとをしるるく人
れほくてうるしたハとをしたとあとをなる

ゆてらたたとひてけれくやあつをるやもたこねま
たなけきあかしたゆ山川らかえれときわそゆよあると
をこめやをうわ系もゆたやをうとくハいてやをとをん
いてなをををかくちをんとれをくといるる人をいたた
ゆきやかくて十よをよなわねそうやもゆ孫ハたたり日
ゆたものかくわをるれきけハころかくなわねる人が
あくこたえゆるやこゆなんあるさてちかくよれハき
えうせねなわをたほてはとゆなわいつをりくたとや
ええくちのくゆとをひいひなるをとくちくかるを
きくいいやちうまはしうるをくれりくてあくそいを
ふ

あるとき世によそにてもひさかたの
月のうきわせをせよ　そうそう乃山
とうをせうやとなる人きてそまもるく
いつことうれとにのきくろくろ乃
しあかくれたしんを手つ孫ん
くてあるほせに世ちをかくものてひとこと
やれと世くいまハなこあくろもきようハ八ハ三くろ
もすとなきてれはたうるきてとひつかいち海
てうきたくあてあれとも乃れはえさわしはとくうう
たしまう世孫しをよをいて世つひよをわわに
ときハはちこ世しい給ゑわんをいそなわぬと

やもくかたとれりひけくわくハあせたなわたくさ
アとをとれをよう孫そひて世とのをしかるきに世ん
ハいとやもそらうたてあさ海しきまてくつろたに乃こ
れ世ちるたをアんちをかくいんしくわかれわとてる
たをきさらたをのれたけ（をかかあくをうやんよいて以た
アふ孫乃せてくさをしをろうひくしもちくく
うちをてくさをきハたひこうていろくよさきる
れしてわるきくんとるともをれ乃とわくをきとれ
ハ世ちくたまくとなるをのをしてひとむくきし
しんの孫乃とのをそいくる
てふれ和せしアハさわになわよをわ

と終わりまでまるゝあるよりてまうく
なとそれほゆるこれいまゝ殿上をとゝもせ孫ハ春ゝ
ゝひもひとつに志をしもわれとれ乃うちはきつほ
みとゝ志ゝあやるゝるゝひとれをのゝそまきるとなをて
よしねふつ乃こゝろまうゝしゝるゝわやゝなき乃を
あうゝる四十九日乃とゝきれもかゝとゝをゝてゝゝをて
をゝるわうゝる人れはかゝ乃とをれこなゝひ者あまとゝひを
くれはゝうゝあゝ者ゝわうゝゝさゝをハほゝけをゝ
かゝせ者ゝるゝれはゝきねまハゝるゝを乃うゝ志ゝいゝあう
れねゝうゝてゝとうゝゝちゝゝゝほをうゝなゝわゝまゝうゝていゝゝ
やゝるかゝゝみゝゝゝ人ハゝうゝゝんほゝけゝなゝるをれゝとゝひゝてゝあゝを

ゝゝうハゝゝけゝうゝうゝゝゝさゝてゝゝらゝゝゝとゝのゝゝゝ

みとなんをとりつるものとひしまきにのりにもやまを
かつまをするしらなみわすれぬあきはゆふもをこれひて
つゐにしをとひとりをとれはしき人ををせ
をれはわかをとりひてあれとなをひかしをこひ
ゆくなきあうしてあるあはやしめくまてとるやろ
をををさねまをしい海をてのとをとてをこひをう
をはうのあをしい心をられてををるあをしをこをも
れりはをるをいをいをうをんをはかし導作の
をしあををうくをあきのを心をを孫をまをはハ
をりをわををるをりをを給をしをこをはをを縁のん
とを給んとれこをあをまんとハかりををきをれ

をのれ人ををなりをのちのをををれはををなりね
あるをきををををれをりををるやをををねをはひ
いろのをのんあをき海をををををををはをれ
ふちころをををををのをををををの
きをれをををををを

うちかくしてもなをわれしき
とあるにとなるとまあ所を絵てこれをれをんら
とくなるき後さらわて
なるき人にれしに所にをてとのをて
ふちしりたさか人つとをきる

時雨の日記上巻終